



新里達也 (編著), 横原 寛・大林延夫・
露木繁雄・高桑正敏 (著)
「カミキリ学のすすめ」

海游舎

2013年9月20日発行 320 pp.

定価 3,570 円



図1. 山芍薬に集うフタスジカタビロハナカミキリ
(「カミキリ学のすすめ」表紙・分島徹人画)。

一読した印象は、昆虫学のなかで分類学、その基礎となる標本、コレクションの重視を基本的立場として、さらに標本を集めるための採集技術とその知識の集積、分類と関連しての生態や生物地理などに内容を広げて、カミキリのさまざまな側面を、5人の著者が分担した。いわばアマチュアよりの立場(著者の多くはプロだが)のカミキリ昆虫学で、表題の意味もその辺にあるかと推察される。虫屋向け話題も多く、肩のこらぬ高級啓蒙書という位置づけかと思った。

しかし半月おいて、もう一度読んでみたら、まったく別のことが見えてきた。5人の著者がカミキリに対して持っている、非常に強い愛着である。それが5編ともに現れていて、本書をコラボとしてみると、何か別の意味に見えてきた。この本はカミキリの本ではなく、カミキリ屋の生態を書いた本ではないか？

日本では、子供のときには多くの人が虫好きとなる。大多数は大人になるにつれ、虫から離れるが、大人になって離れるどころか、のめりこむ人がいる。それが虫屋である。虫屋はその後ももう一度篩いに掛けられる。生活するため仕事についたときである。残念なことに、ここでかなりの虫屋は脱落する。ところがカミキリ屋はなかなか脱落しないらしい。“趣味は昆虫採集です”と虫屋は

ときどき人に言うが、本書著者クラスのカミキリ研究は、趣味としてはむろん桁外れである。では、なぜカミキリ屋には特に熱心な人が多いか？カミキリはなにか特別なものだろうか？分類学的位置づけとは別に、カミキリには、人を夢中にさせる特別な要素があるようだ。

著者たち全員の記述には、森林が随所に出てくる。森とカミキリは切っても切れない関係のようだが、これは植物をホストとする生態から当然かもしれない。森林は日本人の感性では、特別な意味があるという(柳田國男他)。なぜカミキリ屋はカミキリに夢中になるかと考えていたときに、思いついたのであるが、われわれの感性では、カミキリは特別な存在、森の精のように感じられるのではないか。メソポタミアのフンババでも、物の怪姫のゴダマでもない、生きて実在する森の精、それがカミキリではないか。だから100年前、ベーツも日本のハナカミキリの一種にニンフと名を付けた。

5人の第一線カミキリ屋たちが、カミキリに対する愛着をぶつけて書いてくれた本書を読んだら、内容の学術的レベルや著者の思いとは関係なく、突然頭に浮かんだ。いささか脱線したが、一読をお勧めする。

(小宮次郎)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒142-0051

東京都品川区平塚2丁目5番8号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社

◇学会の発行物・バックナンバーの販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3

三番町 MY ビル 3階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>